# 第１回アメリカ合衆国理学療法研修報告

筑波技術大学理学療法学専攻

薄葉眞理子

**要旨**：2005 年 11 月 23 日～ 12 月 4 日までアメリカ合衆国モンタナ州およびアイオワ州の州立大学理学療法学養成課程、大学付属病院、開業理学療法クリニック等へ学生 4 名を引率し、アメリカにおける理学療法の臨床・教育・研究について研修を行った。渡米中、様々な研修を行うとともに、アメリカの学生との交流を積極的に図り、貴重な体験を数多く得た。

**キーワード**：理学療法学，アメリカ合衆国，国際交流

## 1. はじめに

筑波技術短期大学国際交流委員会では平成 17 年度に初めて理学療法を内容とした研修を米国で行った。このプロジェクトが企画された背景には、「将来留学するなら米国へ行きたい」「リハビリテーション先進国である米国の理学療法を見たい」という学生の声と卒業生の井口正樹氏（理学療法学科卒 2 期生）がアイオワ大学大学院に留学中ということがあった。井口氏は以前一時帰国中に来学し、留学経験をテーマに在学生向けの講演を行った。アイオワ大学で充分な支援を受けながら活躍している様子が伺えた。

そこで平成 16 年度に黒川哲宇元一般教育教授と共にアイオワ大学を事前訪問し、筑波技術短期大学を紹介する講演を行って相互理解を深め、本学理学療法学科の学生がアイオワ大学にて短期間研修する承諾を得、平成 17 年度国際交流活動としてこの研修が開催されることになった。

一方、スペシャルオリンピックスで Global Clinical Advisor を兼任している Donna Baingridge, PT, EdD, ATC からもモンタナ大学を訪問して欲しいとの誘いを受けことから、急遽モンタナ大学訪問を研修内容に追加する運びとなった。

## 2. 研修について

### 2.1 研修期間

平成 17 年 11 月 23 日～ 12 月 4 日（秋休暇期間）

### 2.2 参加者

参加者 5 名の内訳は 1 年生　本村美咲、森田美子、2 年生　片伯部公次、世戸由紀菜、教員　薄葉眞理子である。海外渡航経験に関しては、初心者 1 名、観光で行ったことがある 2 名、海外生活経験者 2 名（教員含む）であった。

### 2.3 目的

1）アイオワ大学およびモンタナ大学の理学療法学科を訪問し、授業に参加する。

2）米国における理学療法の臨床現場を視察する。

3）アイオワ大学およびモンタナ大学の教職員および学生と交流する。

4）アメリカ留学について概念的に理解する。

### 2.4 出国前までの事前準備

出国前までに医学用語と英会話（主に自己紹介）のセミナーを 4 回行った。

### 2.5 研修内容

#### 2.5.1 モンタナ大学

1）モンタナ大学について

モンタナ大学はモンタナ州ミズーラ市に 1893 年設立。学生数はおよそ 15,000 人（内大学院生 1,780 人）、教員数およそ 600 人、留学生数およそ 400 人（64 ヶ国）の中規模の州立大学である。

図１　キャンパスを案内してくれた学生と共に（モンタナ大学構内、モンタナのシンボル、グリスリーベアー像の前で）

2）モンタナ大学の理学療法士養成課程について

モンタナ大学の理学療法士養成課程は博士課程である（米国の理学療法士養成課程の殆どは博士課程）。このモンタナ大学は医学部や大学付属病院が併設されていないため、理学療法士養成課程は単独で School of Physical Therapy and Rehabilitation Science という名称の研究科であ

る。学生向け臨床教育を目的とした学科付属の Nora Staael Evert Physical Therapy Clinic という理学療法診療室（常勤理学療法士３名）と The New Directions Wellness Center という特殊外来専用運動機能訓練室が校舎棟内に設置されている。前者は一般病院における理学療法診療と同じ、回復を目的とした医療（外来のみ）を理学療法士が行っている。臨床実習施設の一つとして使用されている。一方、後者では慢性疾患のある低所得者の身体障害者のみを対象に運動機能維持のための訓練を提供する場となっている。ここで学生は臨床実習前の患者とのコミュニケーション能力を養う場として使用されている。

3）診療室と訓練室の見学

養成課程主任の Steven Fehrer,PhD,PT 助教授が診療室と訓練室を案内。学生達は患者やモンタナ大学の学生に自由に質問し、訓練機器に試乗した。特に訓練室では、多くの訓練室利用者が楽しく運動している中で会話が弾んでいた。

4）授業参加

モンタナ大学では「整形外科理学療法学」と「循環器理学療法学と薬学」の授業に参加した。モンタナ大学の学生に混じって手の関節の検査と関節モヒリゼーションの演習を行った。事前準備をした骨の名称や関節の動きに関する医療用語が役に立った。循環器理学療法学と薬学の授業では、日本では珍しい講義内容を聞くことが出来た。

5）昼食会とキャンパスツアー

昼食会に招待され、日米の学生と教員が一緒に会食する機会を得た。当日学生は早起きして小さなおにぎりを沢山持参した。また、雪が降る寒い日であったが、モンタナの学生による１時間程のキャンパスツアーに参加した。

6）リハビリテーションセンターと開業院を見学

ミズーラ市ではモンタナ大学キャンパスの外に、

図２　運動機能訓練機に試乗する学生

図３　モンタナ大学の学生と一緒に関節モビリゼーションの演習をする学生

「Community Rehabilitation Center」（地域リハビリテーションセンター）と理学療法の開業医院を Baingridge 氏の案内で訪問した。リハビリテーションセンターでは日本では数少ないリハビリテーション専門ナースに会い、明るい雰囲気の訓練室やリハビリ用に整備された病室を見学した。偶然にも交通事故による骨盤骨折で歩行訓練中の日本人女性を見舞うことができた。開業医院は Brent Dodge 氏の「Montana Orthopedic Physical Therapy」整形外科専門理学療法クリニックを訪問した。ここでは頸椎症の女性患者と人工椎間板術後１ヶ月の男性患者の治療を見学した。

図４　Community Rehabilitation Center 玄関前にて

図５　頸椎症に対する治療を見学する学生

7）宿泊

ミズーラ市滞在中は、キャンパス敷地内に建つ留学生用アパートに宿泊し、留学生気分を少し味わった。毎夕食後、アパートの食堂で医学用語の自主勉強を行った。アパートから徒歩 15 分のところに小さな商店街があり、朝食に必要なものはスーパーで購入した。

図６　留学生用アパートの食堂で自主勉強をする学生

5-2　アイオワ大学

1）アイオワ大学について

アイオワ大学はアイオワ州アイオワシティー市に 1847 年設立。学生数はおよそ 30,000 人、教員数およそ 1700 人、留学生が 7% を占める（109 ヶ国）大規模な州立大学である。学部専攻が 100、大学院は 114 分野に亘る。理学療法の正式名称は Graduate Program in Physical Therapy and Rehabilitation　Science である。

2）アイオワ大学の理学療法課程について

アイオワ大学には、博士課程の理学療法養成課程の他に、理学療法の免許を既に取得した人が更に学ぶ博士課程がある。後者の課程に卒業生の井口氏は在籍している。

3）教室などの見学と昼食会

課程主任の David Nielsen, PhD, PT 教授が教室、実習室、実験室、理学療法の学生専用ラウンジを案内。ラウンジと言ってもくつろぐ場所ではなく、PC 機器・ソファ・関連書籍が整備されている理学療法の学生のみ 24 時間利用可能な自習室である。

アイオワ大学でも日米学生合同の昼食会が行われた。リラックスした雰囲気の中で、会話が弾んだ。

4）Shadowing

アイオワ大学では大学付属病院（762 床、医師 1316 名）の理学療法診療部門を訪ね、部門主任の Ken Leo 理学療法士より部門の説明を受けた。ここの診療部門はとても広く、更に物理療法室、循環・呼吸器理学療法室、運動訓練プール室、職業訓練室、歩行訓練室、整形外科理学療法室などに分かれている。部門の説明の後、学生ひとりひとり

図７　Leo 氏より病院の説明を受ける学生

が各々理学療法士に付き添って理学療法の治療場面を１～２時間見学した。影のように理学療法士について回るので、「Shadowing」と呼ぶ。薄葉は２年生の世戸さんが Debra Weiss 理学療法士の shadowing をしているところに同行。病室に行く前に、術前術後のレントゲン写真やこれからどのような治療をしようとしているのか、説明を受けた。症例は股関節前置換術後１日目の女性で、病室では簡単な検査と歩き方の説明の後、理学療法士と一緒に歩行器で病室の外まで歩いて戻ってきた。昨日手術したばかりの人とは思えない、と学生は驚いていた。治療後、スタッフ控え室で Debra より今後の方針について話を聞き、学生も判らなかったことについて英語で質問をしていた。

5）授業および勉強会に参加

アイオワ大学でも授業と勉強会に参加。授業科目は運動学で、当日の授業内容は歩行運動力学であった。日本で履修済みの内容のため、比較的分かりやすかったと思われる。勉強会ではシンシナチ大学 Timothy Hewlett 氏による講演（前十字靱帯損傷の理学療法について）の後、熱心に質疑応答が行われていた。

6）シンポジウムに参加

アイオワ大学スポーツ医学センター整形リハビリテーション部主催の第 21 回 Hawkeye Sport Medicine Symposium が開催中であった。シンポジウム担当の Glenn Williams 助

図８　Weiss 氏の shadowing 中の学生（アイオワ大学付属病院）

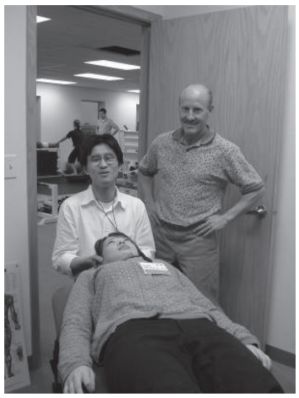

図 9　Reese 氏に実技指導を受ける井口氏と学生

図 10　井口氏（左から二人目）、氏の指導教員 Shields 教授と学生達

教授の招待で私達も参加し、体操のセッションを聞いた。

7）開業院を訪問

アイオワ州でも、理学療法の開業医院を訪問した。David Williams 氏が中心となって 5 名の理学療法士が共同経営をしている「Performance Therapies, PC」というクリニックで、筋力強化とコンディショニングを得意としている。腰椎症の女性患者と故障後のバレーダンサーの治療を見学した。そこで使われていた Soft Tissue Mobilization という手技は、視覚を用いずに、手の感覚を使って行う治療方法ということで、Dave Reese 理学療法士がその場で学生達に実技講習をしてくれた。

8）宿泊

アイオワ滞在中は、キャンパス敷地内に建つホテル「アイオワハウスホテル」に宿泊。設備やサービスは殆ど一般のホテルと同様であり、学生会館に隣接し、非常に快適で便利であった。井口氏と毎夕食を共にし、留学生活の話を皆で聞いた。

## 3. 成果

其々の訪問先で盛り沢山のスケジュールが組まれていたが、学生達は精力的にすべてのプログラムに参加することが出来た。短期間でこれだけの研修をこなすには、引率教員の指導や説明は不可欠であった。しかし、すべてが目新しく異なる文化の中で、悪戦苦闘しながらもプログラムを遂行した学生達は、少しずつ自立心と行動力を養ったと思う。

日本では見ることが出来ない理学療法の開業医院や授業を経験し、明るい雰囲気の中で熱心に勉強する米国の学生たちと交流することで、良い刺激が与えられ、今後理学療法について更に深く学ぼうとする意欲が湧いたと思う。

短い海外研修であったが、留学の様子を体験できた。研修前は、将来留学を希望していながら、不安感と自信のなさから留学することを躊躇していた学生が、「何事も自ら求めなければ始まらないことが分かった」と積極的な意見を述べていた。先輩である井口氏の研究の様子を見て、日本とは異なるアメリカでの生活様式を経験し、徐々に聞き取りや会話が出来るようになる英語漬けの生活を送ったことも貴重な体験であり、将来の夢の実現や留学を考える良い機会となったと思われる。

## 4. おわりに

第 1 回アメリカ合衆国理学療法研修に 4 名の学生が参加し、多忙なスケジュールを積極的にこなし、無事帰国することが出来た。この体験が、今後の学生生活、そして卒後理学療法士として社会に出る将来、前向きな志を支える力となることを希望する。

平成 18 年度第 2 回アメリカ合衆国理学療法研修は夏季休暇中に開催され、学生 3 名が参加した。この研修が引き続き行われるようこれからも企画していきたい。また、この研修のことを聞いた卒業生からも参加希望がでていることから、今後は卒業生の参加も視野に入れて、在学生との合同研修の可能性について検討したい。


## 謝辞

平成 18 年度から渡航費の一部に対する支援が財団より実現した。財団の支援に心より感謝申し上げます。

# The First Physical Therapy field trip in the United States of America

USUBA Mariko

Course of Physical Therapy, Tsukuba University of Technology

Abstract: Four students majoring Physical Therapy and one faculty at Tsukuba College of Technology visited Physical Therapy programs, Physical Therapy Department in acute care hospitals, Physical Therapy private clinics, and a Rehabilitation Center in States of Montana and Iowa, USA from November 23rd to December 4th. While learning the latest approach in the profession of Physical Therapy, our students built self-confidence to challenge new surroundings and different cultures.

KeyWords: Physical Therapy United States of America International Relations